

【団体について】

- ・ビジョン：生まれ育つ環境に左右されず自分の未来に希望が持てる社会
- ・ミッション：子ども若者が安心して力を発揮できる地域のプラットフォームをつくる
- ・活動の方向性：地域住民・企業・学校などと協働し、活動に参画していただき、子ども若者が経済的なハードルを越えて地域資源を最大限有効活用できる状態を目指します。

【本事業の目的】

子ども若者が安心して力を発揮するための包括的支援事業

経済的困窮や不登校、発達障害や精神疾患など様々な背景に育つ子ども若者たち、特に 15 歳～20 歳前後の支援が届きにくい世代を中心の対象とし、孤立化の防止や自分の将来に希望を持てる社会をつくることを目的に居場所づくりをテーマに食事支援、相談支援、学習支援をおこなう事業です。義務教育終了後、気軽に相談できる人が身近にいなくなり、悩みを一人で抱え込んでしまう場合があります。様々な事情で親を頼ることができない場合もあります。安心して相談できる大人との信頼関係性をつくることで、子ども若者たちの孤立化を防止します。また、一人ひとりの持つ力や可能性を十分に発揮できるような社会参画の機会を創造していきます。

【活動内容】

- 居場所事業（食事暮らし支援・体験活動・キャリア教育）
- 個別相談・訪問支援・同行支援事業
- オンラインを活用した情報発信・情報交換会

【活動実施回数及び延べ受益者数】

のべ 412 回実施

のべ 2016 名

【アンケート結果】

93.3% …まなびやももを利用して前向きな変化があったと思う

90% … 自分の気持ちや考え、好きなことを話す・表現する機会は増えている

「周りに言っても理解してもらえなかったことが理解されたのは初めてでした。」

【実施内容と成果】

1) 居場所支援、食事支援、体験活動

食事支援や宿泊支援のある居場所支援を実施しました。経済的困窮や不登校、発達障害など社会的孤立リスクの高いこども若者や家庭とつながり、安心して過ごせる居場所と温かさを感じることのできる暮らしサポートをおこないました。相談の敷居を下げるため、話しても話さなくてもよい場づくりや、希望に応じて必要な機関や支援につなぐことができることを伝えるための情報誌や相談スペースの案内をおこないました。家庭不和や病気や障害によるメンタル不調のため、自宅での生活が難しくなった際に、医療機関や福祉制度を利用できるまでの緊急対応としてショートステイやトワイライトステイも実施しました。体験活動ではものづくりやスポーツ、芸術など多様な体験の機会を企画し、こどもたちが意欲と創造性を育むきっかけづくりをおこないました。

2) 相談支援（同行支援、訪問支援含む）

・個別相談を実施し、ニーズや状況のヒアリングをおこないました。希望や必要に応じて、適切な医療や福祉につなぐ伴走支援に取り組みました。

・経済的困窮状態にある場合、心身の不調を抱えているにも関わらず医療機関を受診することができないケースもあります。生活もままならない状況がある場合は、緊急対応として医療機関受診のサポートや社会福祉制度の申請に関わる支援をおこないました。また、他機関と連携して対象者をつなぐ際にはコミュニケーションシートを作成し、利用者ご本人やご家族の状況や希望を言語化、可視化するサポートもおこないました。希死念慮や自殺企図、ネグレクト傾向など深刻なケースでは早急な対応が必要となり、柔軟にサポート内容を工夫しながら医療などにつなぐことができました。

3) 情報発信、情報交換

・インスタグラムを活用した情報発信を実施しました。日常的な様子をプライバシーに配慮しながら公開し、ネット検索で居場所や支援を探しているこども若者やその家族に届けました。インスタライブを利用して情報発信を実施しました。こども若者やその家族、ボランティアや寄付者などが交流する機会がうまれました。

・情報交換会では保護者同士の経験談を話す機会や、精神保健福祉士や不登校経験者とその保護者を交えた座談会をおこないました。

【事業実施に関わる工夫】

1) 特に相談支援（同行支援・訪問支援含む）のニーズは大きく計画時の4倍ほどの利用者にリーチすることができました。相談のハードルを下げることで、気軽に立ち寄ることができる夕方以降の時間帯に居場所や相談を実施したこと、雑談ベースで面談をおこない関係構築と利用者のペースを尊重したことが工夫点としてあげられます。高校生以上になると医療費もかかるため、ご本人やご家族の経済的な状況によりメンタル不調などを抱えていても医療につながりにくい場合もありました。緊急支援として医療につなぎ福祉制度の相談や申請のサポートなど伴走支援もおこないました。

2) SNS を活用し、若者や保護者向けに日々の活動の様子やイベント、交流会、勉強会などの周知や当事者に向けたメッセージの発信をおこないました。不安を抱えている状況で新しい場所に相談や見学の問い合わせをおこなうハードルは非常に高いと考えられているので、安心して親しみやすく感じてもらえるように、居場所や相談への精神的ハードル、時間的ハードル、地理的ハードルの減少を工夫しました。

【本事業を通して新たに把握した対象者等のニーズ・課題】

1) 不登校や発達障、またそれらの傾向を持つ子どもたちは、高校生以上になると学内外での支援の機会が極端に減少してしまい、悩み事や困りごとを一人で抱え込んでしまう課題を把握することができました。小中学校では特別支援学級や通級、（保健室）が逃げ場や頼れる場になっていた場合も、高校になるとそのような環境と支援が整備されている学校はほぼありません。大学ではバリアフリー支援室など発達やメンタル不調を抱える若者への支援の拡充がみられています。

2) 不登校傾向と呼ばれる子どもたちは学校を休みたいということが言えずに自傷行為を繰り返しながら登校していたり、メンタル不調を抱えていてもご家族の意向で病院を受診できなかつたりと、希望する必要な支援につながりにくい現状がわかってきました。香川県では高校生から医療費がかかるので、中学生までは通院していた場合も高校生になると経済的な負担から通院をストップしてしまう経済的に不安定なご家庭もありました。

3) 先生や保護者、友人など近い存在で自分のことを応援してくれている人たちだからこそ「迷惑をかけられない」「期待を裏切ってはいけない」というプレッシャーを感じており相談できないという声も多くありました。また、何らかの逆境体験を経験している場合、同じ経験をしている人でなければ自分の悩みや苦しさをわかってもらえないと感じるという声もありました。これは過去に家族や友人、先生に相談しようとしたことがあるが理解してもらえなかった、「考えすぎ」「精神的に弱い人は社会の役

に立てない」「甘えてはいけない」「もっとがんばろう」などの言葉に傷ついた経験からきている学習性無力感があることがわかりました。これらの経験から苦しさがあつたとしても誰にも言えない、わかってもらえないという認識が強くなり援助希求力が低下し、自傷行為や希死念慮につながっている傾向が見えてきました。

【新たなニーズ・課題に対しての取り組み・工夫】

- 1) 高校の先生や主治医の先生に利用者の状況を共有するため、体調面・生活面・精神面・希死念慮・一番困っていることを整理してコミュニケーションシートを作成し言語化のサポートをおこないました。その結果、親にも頼れず、主治医との意思疎通ができずに何件も病院を店員していたオーバードーズや希死念慮の強い若者が、主治医との関係構築をおこなうことができ、継続的に通院やデイケアサービスの利用を開始するなど適切な医療や福祉につながることができました。
- 2) 安心して無料で利用できる県の精神保健福祉センターにおつなぎし専門職から見て通院が必要な場合はご家族に通院再開の必要性をお伝えするようにしました。精神科や心療内科での治療は長期的に取り組んでいく必要があることもご家族に説明するサポートをおこないました。メンタル不調と就労の難しさを抱えた親を頼ることができない若者の医療機関受診や社会福祉制度（生活保護や障害年金等）の相談、申請の同行支援をおこないました。1年ぶりに医療サービスをうけることができ、生活保護受給も決定し、今は治療に専念できる安定した生活を送り始めることができています。
- 3) a) 8月末に複数の相談窓口で電話やチャット相談をしていた若者が当団体につながりました。最初はなにが辛いかわからないが死にたい気持ちになるということでした。面談のなかで、ご自身の持つ障害やメンタル不調、就職先未定の状況に加え、ご家族のご病気により経済的負担が増えたこと、今までもずっとヤングケアラーとして家族を支えてきたご本人の負担が増えバーンアウトをおこしている状況がわかりました。相談内容の緊急性と深刻さから、東京の相談窓口が警察に連絡し、深夜にご本人のご自宅に訪問されました。ご家族には何も相談できていない状況だったため、ご本人もご家族も大変混乱され、当団体に連携要請の連絡がきました。深夜でしたがショートステイをおこない、翌日からゆっくり食事をしながら医療機関の受診やご家族との関係性や若者ケアラーとしての精神的身体的負担についても話し合いました。コミュニケーションシートの作成や医療機関や福祉窓口への同行支援をおこない適切に医療と福祉につなぐことができました。
- 4) b) どんな些細なことでも相談してもいいということや、どんな気持ちがあっても大丈夫であることを伝え、自傷行為以外に代替できるセルフケアを検討し試してみるといった心理教育の機会を面談とともに設けました。言語化が苦手な場合は絵カードや気

持ちシートなどの補助ツールを用いて、自分の気持ちや状態にまずは気付くまことを練習しています。またこども若者や保護者に向けたセルフケアコラムや相談の呼びかけなどを SNS、公式 LINE での啓発メッセージとして配信しました。相談のハードルを下げるとともに、頼ることに慣れていくことや、その人自身が持つ回復する力や自分を大切にすることやスキルを育成し蓄積していくことができました。

【受益者の声】

他の相談先に比べてハードルが低いので親子共々お世話になりました。色々なところに相談に行きましたが、相談内容に制限や縛りを感じる事が多く（その相談はここでしてください、や担当が違うなど）、悩みに応じて相談先を変える必要があることにすごく負担を感じていました。今の状況や経緯をそれぞれの相談先に一から話すことや、ここでは相談に乗ってもらえないのかという絶望感を感じることも度々あり、相談することに対して諦めを感じたこともあります。それに比べてももさんは縛りなどなく話を聞いていただけだと思います。（中学生不登校保護者）

まなびやももを利用させて頂くと同時期に、適応指導教室の面談を受けたのですが、利用までに学校を通して約1ヶ月、その間刻一刻と過ぎていく日々に、利用に関する気持ちの変化も出てきてしまい、親子でモヤモヤ、いざ面談では掘り掘り答えにくい事の質問や、学校に戻る事を前提とされた話など、娘もやはりそれらを感じ取ってしまい、行きたくないといいました。しかし、反面、スリーステップで利用開始を許可して頂いたまなびやももは、喜んで通ってくれる様になりました。自分の理想としている環境に近いと言っています。不登校という辛い中ではありますが、親子ともども心の拠り所とさせて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。（小学生不登校保護者）

中学生の時初めて、まなびやももを紹介してもらい、友人と行ったのですが思っていたよりも明るい雰囲気でした。ももではよく相談事を聞いてもらっています。今までの相談相手は友人が多くどうしても意見に違和感を感じる事があったのですが、ももでは大人の人も意見を聞いてしっかりと考えて優しくアドバイスして下さるので助かってます。大人の人からのアドバイスは同い年である友人よりも的確で違和感がないので有り難いなと思っています。（10代後半若者）

親や友だち、先生に言っても理解してもらえなかったことが理解されたのは初めてでした。まなびやももは周りから理解されにくい子ども達の居場所になっていると思います。（高校生）

辛い気持ちも聞いてもらって、助けてもらって、色んなわがままも聞いてくれて、あの時、どん底に落ちてた私を救ってくれて、すごくうれしかった。あの時に、ももの存在がなか

ったら私本当に死んでたかもしれない。きっと死んでたと思う。本当に私を救ってくれて、ありがとうございます。(大学生)